

## 第2回神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会

### 議事次第

- 日時 平成15年6月26日(木) 15:00～
- 場所 経済産業省別館1012号会議室(経済産業省別館10階)
- 議事
  - 1. 神経芽細胞腫マススクリーニング検査について
  - 2. その他
- 配布資料
  - 1. 神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会の設置について
  - 2. 神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会委員名簿
  - 3. 第2回神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会参考人名簿
  - 4. 第1回神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会における主な議論
  - 5. 各国の神経芽細胞腫の年齢調整罹患率と累積罹患率
  - 6. 神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会に対して寄せられたご意見
    - (団体から寄せられたご意見)
      - (1) 日本マススクリーニング学会
      - (2) 日本小児がん学会
    - (個人から寄せられたご意見)
      - (1) 西基氏
      - (2) 成瀬浩氏
      - (3) 澤田淳氏
  - 7. 神経芽腫マススクリーニング(山本参考人提出資料)
  - 8. 平成14年度子ども家庭総合研究事業「マススクリーニングの効率的実施及び開発に関する研究」分担研究「神経芽細胞腫マススクリーニング・プログラムの疫学評価」報告書(林参考人提出資料)

## 神経芽細胞腫マスキリング検査のあり方に関する検討会について

### 1 目的

小児がんの一種である神経芽細胞種を早期に発見し、できるだけ早い段階で適切な措置を講じることを目的として、6～7ヶ月の全ての乳児を対象に、尿によるマスキリング検査を行う事業(神経芽細胞腫検査事業)が昭和59年度以来実施されてきたところである。

近年、欧米において神経芽細胞腫マスキリング検査の有効性に関して疑問があるとのいくつかの報告がなされ、日本においても本事業の実施が与える影響について検討する必要がある。

このため、雇用均等・児童家庭局長が参集する検討会を開催し、神経芽細胞腫マスキリング検査の今後のあり方について検討を行うこととする。

### 2. 構成

- (1) 検討会の参集者は別紙のとおりとする。
- (2) 検討会に座長を置く。

### 3. 会議の運営

- (1) 検討会は、座長が招集するものとする。
- (2) 会議の運営に関し必要なものは、座長が定めるものとする。

4. 検討会の庶務は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課が行う。

### 5. 検討会の公開

検討会は第1回から公開する。

### 6. 検討課題

神経芽細胞種検査事業の今後のあり方について

### 7. 検討スケジュール

- ・5月に第1回検討会を開催。
- ・夏頃を目処にとりまとめを行う予定。

## 神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会委員名簿

(敬称略、五十音順)

氏 名	所 属
う め だ ま さ る 梅 田 勝	千葉県健康福祉部長
つ ぼ の よ し た か 坪 野 吉 孝	東北大学大学院公衆衛生学助教授
は し づ め こ う へ い 橋 都 浩 平	東京大学医学部教授
は た じ ゅ ん い ち 秦 順 一	国立成育医療センター研究所長
ひ さ み ち し げ る 久 道 茂	宮城県病院事業管理者
ま え の か ず お 前 野 一 雄	読売新聞社医療情報部次長
や な ぎ た き み こ 柳 田 喜美子	日本医師会常任理事
よ し む ら た け す み 吉 村 健 清	産業医科大学産業生態科学研究所臨床疫学教授

## 第2回神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会参考人名簿

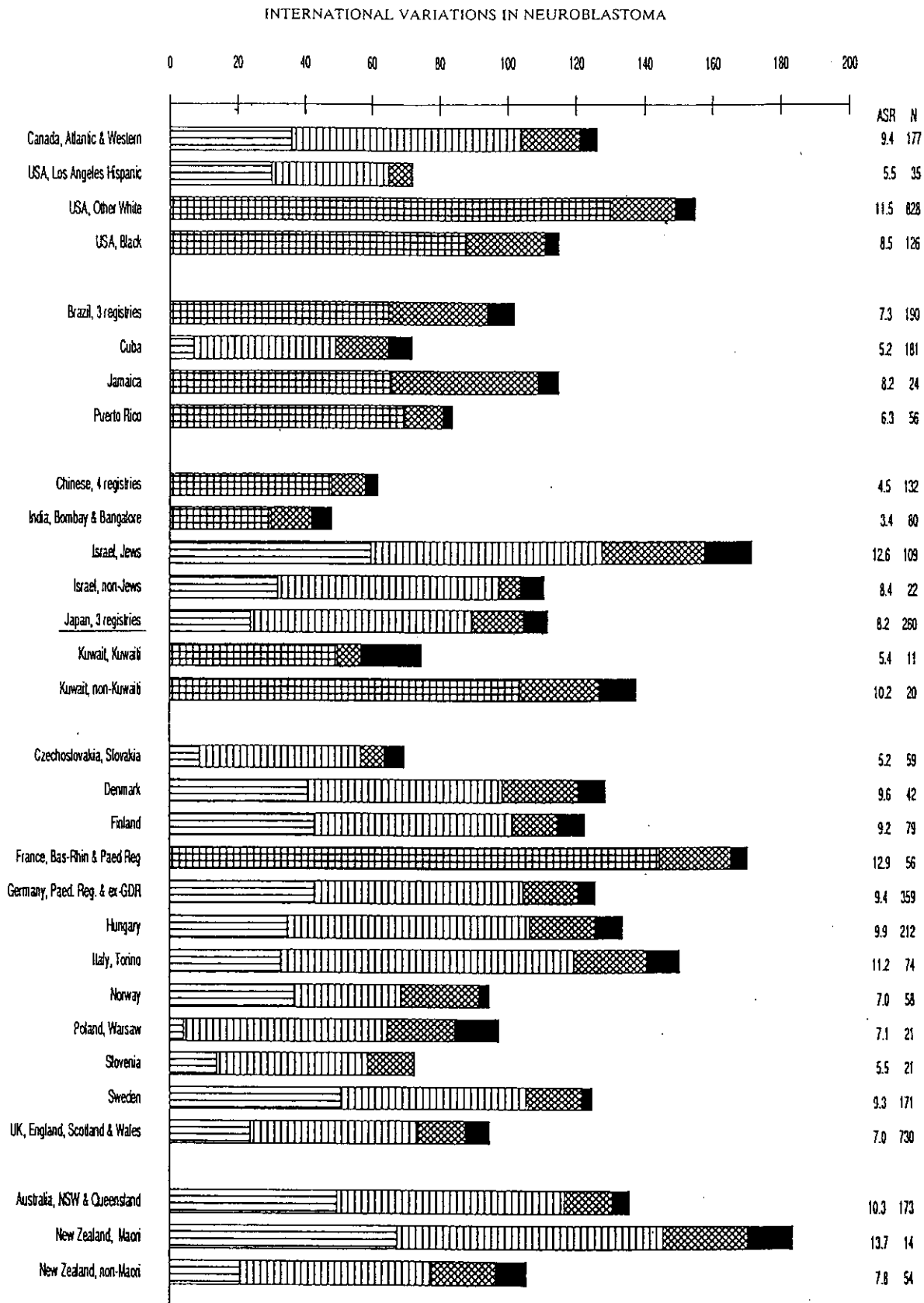
(敬称略、五十音順)

氏名	所属
林 邦彦	群馬大学医学部保健学科医療基礎学教授
松田 一郎	日本マススクリーニング学会理事長 熊本大学名誉教授
山本 圭子	日本小児がん学会神経芽腫委員会委員長 埼玉県立小児医療センター参事

第1回神経芽細胞腫マススクリーニング検査のあり方に関する検討会に  
おける主な議論

- （1歳～4歳における）神経芽細胞腫の死亡率の減少を、どのように解釈するべきか。（梅田委員）
  
- 神経芽細胞腫の発生について民族差はあるのか。（前野委員）

## 各国の神経芽細胞腫の年齢調整罹患率と累積罹患率



- Cumulative incidence of neuroblastoma and ganglioneuroblastoma per million in population-based series, with age-standardized annual rates per million (ASR) and total numbers of cases of neuroblastoma (N). Sources: USA Other Whites and Blacks, Greater Delaware Valley, Los Angeles, New York and SEER Program; Brazil, Fortaleza, Recife and Sao Paulo; Chinese, Shanghai, Taipei, Hong Kong and Singapore; Japan, Kanagawa, Miyagi and Osaka. ■, 0-4; ▨, 5-9; ▩, 10-14 years.

C.A. Stiller and D.M. Parkin, International variations in the incidence of neuroblastoma.

Int.J.Cancer:52, 538-543(1992)